

火の海をくぐり抜けて ～19歳の私が見た東京大空襲～

佐藤 玲さん（大正 14 年生まれ）

私は 1925 年（大正 14 年）3 月 30 日、東京市日本橋区（現在の東京都中央区日本橋）通一丁目 4 に、兄二人、姉二人の末っ子として生まれました。

祖父は、仁右衛門島（千葉県鴨川市）の出身で、日本橋に出て来て、大変な苦勞の末、「島平（しまへい）旅館」を開業しました。旅館の名前は仁右衛門島の「島」と名字の「平野」からとったと父から聞きました。

1923 年（大正 12 年）9 月 1 日の関東大震災で、その島平旅館は焼失してしまいました。私が生まれた頃、父は、その跡地に建てられた貸家の管理運営にあたっていました。父は面倒見の良い人で、周囲の仕事や生活の世話等をよくしていたようで、多くの人に慕われ頼りにされていました。母は厳格な父とは対照的に、明るく楽しい人で、誰にでも分け隔てなく接する優しい人でした。そうした父母のもと、5 人兄弟の末っ子に生まれ育った私は、家族からも近所の人達からも、とても大切にされました。

当時の日本橋には、日本を代表する大きなデパート（三越、白木屋、高島屋）があり、市電や市バスも通り、東京駅も近く、何でも揃う場所で、日常生活に事欠く事はありませんでした。中央通りにある白木屋の前に住んでいた私にとって、街も人もとっても活気のある「日本橋」の思い出は、今も私の心を温かくしてくれます。

1941 年（昭和 16 年）12 月、太平洋戦争が始まりましたが、私が昭和 17 年に上野高等女学校を卒業した後、2 年間くらいは、長唄のお稽古やお茶、お花といった習い事も続けており、特に不自由なこともなく普通の日常生活を送っていました。

1944 年（昭和 19 年）の頃から、太平洋戦争の戦況が悪化し、それまで、習い事の他に父の仕事を手伝っていた私は、浜松町にある茅場製作所という軍需工場の会計係として、勤めるようになります。翌年の 1945 年（昭和 20 年）には、東京にも毎夜のように、B29 の空襲があり、多くの人々が焼け出され逃げ惑いました。私も、浜松町からの仕事の帰り道は、戦闘機が上空に飛んでおり、ビルの陰に隠れながら帰宅することが多くなりました。

当時、自宅には、父、長兄夫婦、次兄夫婦、すぐ上の姉と私が住んでいました。長姉は銚子に子ども 3 人と疎開しており、母も一緒でした。母は、疎開前に自宅にあった着物や洋服を少しずつ小包にして、何度か銚子に送りました。その他の物は、自宅近くのビルに何か所かに分けて預けてありました。3 月 10 日の大空襲で、国分商店（現「K & K」）の地下に、預けてあった長唄の道具や木製の小玩具を除いて、他は全て燃えてしまいました。

1945 年（昭和 20 年）3 月 9 日、19 歳の私は仕事から帰って来て日本橋の自宅にいました。夕方 6 時頃から、灯火管制（夜間に空襲に備えて電灯や明かりを消したりして光が漏れないようにする規制）のサイレンが聴こえたので、自宅前のビルに避難しました。焼夷弾がバラバラ、バラバラバラッと大雨が降るように落ちて来て、家々が燃えて、自宅にも 4 発が当たって火事になりました。周囲の民家が燃えると、火はビルの中に入って、中が燃え上がっていました。ビルの窓からは

蛇の舌のような炎がものすごい勢いで出ているのが怖かったです。そのビルにいるのは危険だったので、私と義姉は二人で、別の場所に逃げました。みんな一緒に死んでしまうということを守るため、家族は、それぞれ2, 3人ずつ分かれて逃げました。父は町内会長だったので、そこに残り、見廻りをしていました。

私達は、東京駅の八重洲方面に逃げて行き、途中で、警防団の人に近くのビルに入るように言われました。しかし、そこは何となく気味が悪い感じがしたので、入るのをやめて、更に、丸の内方面に逃げました。後で聞いたところ、そのビルに逃げた数名の方々は全て亡くなったということでした。丸の内に行って、小さなビルの地下に逃げ込みましたが、そこも周囲が燃えて火が入り、煙がひどくていられなくなり、バケツ 3 杯くらいの水をかぶって外に出ました。街の多くの場所には、防火用の水桶があり、バケツも備わっていました。その時、同じビルにいた赤ちゃんをおぶった若い母親に、「背中の赤ちゃんにも水をかけて欲しい」と頼まれました。水をかけようとしたら、赤ちゃんは母親の背中で亡くなっているようでした。しかし、19 歳の私にはその事を母親に伝えることは出来ず、黙って水をかけてあげました。かわいらしい男の子でした。今でも、その赤ちゃんの顔を思い出すと、辛く哀しくたまらない気持ちになります。

大きな荷物を背負って逃げている人も多く、それに火がついて火の玉になって転がって来ます。それを避けながら逃げなければならず、周りが全て火の海なので、10 杯くらいの水をかぶっても10 分くらいで乾いてしまいます。私達は水をかぶりながら、安全な場所を求めて逃げ続けました。私は母が用意したリュックサックを背負っていました。母から「これだけは、何があっても手放さずに持っているように」と言われていたので、用水桶のある所に行けば水をかけて、持ち歩いていました。3 月で未だ寒かったので、コートを着ていましたが、そのコートは焼け焦げだらけの状態でした。

市電のレールは、熱で真っ赤になっていました。アスファルトの道路は溶けて柔らかくなっていて、靴には穴があいてしまいました。とにかく恐ろしくて、私が知っていた穏やかな街の光景は無くなっていました。

再び、警防団の人に勧められて、大きな銀行の地下に入りました。その地下には 40~50 名の人達が避難していました。朝の 6 時頃でした。

辺りが明るくなるのを待って、私達は日本橋の自宅に戻りました。家は影も形もなく全部燃えてしまっていました。行き先を知らせるために書こうと、消し炭を捜しましたが、それすら無い程、すっかり燃えてしまっていました。

しばらく二人で待っていると、別に逃げていた実姉ともう一人の義姉が戻って来ました。

町内を見廻っていた父も鼻の頭に火傷をして帰って来て、お互いの無事を確認しました。4 歳上の姉は職場の砂町の小学校まで歩いて行きましたが、途中、黒焦げの死体がたくさんあって、それをまたぎながら学校まで行ったそうです。

私が卒業した城東小学校は、燃えずに残っていたようですが、江戸橋の義姉の実家も焼失し、見渡す限りの焼け野原に、ビルの形だけが残っていました。着の身着のまま、火の海をくぐり抜けてやっと帰って来た後に見たあの光景は決して忘れることはできません。

我が家の台所の床下収納には、たくさんの米と塩が保管してありましたが、それを見つけ出して取り出すと、米は真っ黒焦げになっていました。しかし、塩は焼き塩になっていました。焼き塩は

大活躍でした。近所の人や通りがかりの人に分けてあげて、大いに喜ばれました。

我が家では、義兄が戦死しましたが、その他の家族は全員無事でした。

終戦後、父母と兄夫婦は日本橋に戻り、焼け跡からバラックを建てて、その後実家を再建しました。しかし、家も物も、そして、たくさんの思い出が詰まった写真も一枚残らず燃えてしまい、豊かで幸せに暮らした日本橋での日々の記憶は、私の脳裏に刻まれたものだけになってしまいました。その喪失感は年を重ねても尚、消えることなく胸に残り続けています。

平穏な日常生活を奪う戦争、大切な多くの人の命を奪う戦争は、絶対にあってはなりません。そして、それはいつの世も、世界のどこの国であっても同じです。

あのように辛く哀しい思いをした者だからこそ、今強く思うのです。

(原文のまま掲載しています)